

Title	新疆に関する覚え書
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学学報. 72(3) p.17-p.28
Issue Date	1986-11-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81126
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

新疆に関する覚え書

勝 藤 猛

MISCELLANEOUS NOTES ON SINKIANG

Takeshi KATSUFUJI

In this paper, the author deals with a few problems, though they are not necessarily interrelated one another, of Sinkiang Province of China in the first half of the 20th century.

Firstly, he deals with the international relations among Russia, British India, Afghanistan and China at the beginning of this century, when Sir Aurel Stein made archaeological expeditions into Sinkiang three times. On one occasion, his party went through north-eastern corner of Afghanistan, whereas she had guarded herself jealously against the northern and southern Great Powers. The question here is why Amir Habibullah, King of Afghanistan, granted the British scholar permission to cross a portion of his territory. The answer may be that Amir Abdurrahman, Habibullah's father, had been strongly advised by the British to retain the Wakhan Corridor as a buffer zone between Russia and India, and was even paid the cost of administration of that secluded mountain region. Habibullah was, therefore, obliged to allow Stein to travel by way of that part of his dominion.

Secondly, being interested in pastoralism, agriculture, and ruling families and personages in Sinkiang, the author analyzes those chapters in Owen Lattimore's *Pivot of Asia* which describes various aspects in the province. Through the analysis, it will be known that Sinkiang has much in common with the Middle East in that there is little rainfall, and the majority of the population are Moslems.

Lastly, comments are given on Lattimore's reference to a Japanese military innovation. As early as in 1933, the Japanese used air-supported motorized troops to overrun the Province of Jehol. The methods taken had, he points out,

never been seen before in the world. The Germans took notice of and developed the methods, by which they invaded into Poland in 1939. The Japanese could have extended their strategic power westward up to Sinkiang, if they had not spared their forces for the Pacific warface after 1941.

まえがき

昭和60年度、大阪外大の関連科目、東洋史学Ⅱ「中央アジア史の諸問題」において、Sir Aurel Stein⁽¹⁾ (1862-1943), *On Ancient Central-Asian Tracks*, London, 1933 の一部を講読の形で扱い、またインド・パキスタン語学科・ペルシア語学科の文化概論「イスラムの宗教と文化」(加賀谷教授と半年ずつ分担)の講義で、Owen Lattimore (1900-), *Pivot of Asia*, Boston, 1950 を主な材料とした。この授業中に浮かんできたいくつかの問題をとりあげて考察したい。両書とも日本語訳⁽²⁾があるが、本稿ではそれに言及せず、原書だけに拠ることにする。

スタインの中央アジア(中国領トルキスタン)調査とその著作

序次	年代	公式報告書	個人的記録
I	1900-01	<i>Ancient Khotan</i> , 2 vols., 1907.	<i>Sand-Buried Ruins of Khotan</i> , 1904.
II	1906-08	<i>Serindia</i> , 5 vols., 1921.	<i>Ruins of Desert Cathay</i> , 2 vols., 1912.
III	1913-16	<i>Innermost Asia</i> , 4 vols., 1928.	なし
IV	1930-31	失敗	

I-III *On Ancient Central-Asian Tracks*, 1933.

第1章 パミールをめぐる国際関係

オーレル・スタインの1933年の本は、1964年に東欧系のアメリカ人 Jeannette Mirsky の8頁分の解説をつけ、図版の一部を省略して、ニューヨークで再版されており、⁽³⁾ 授業にはこれを用いた。全21章のうち1年間で読めたのは、第3章「ヒンズークシ山脈を越えて、パミールと崑崙山脈へ」(第2次調査)、第4章「砂に埋もれた遺跡(Dandan-oilik)における最初の調査」(第1次)、第12章「敦煌千仏洞」(第2次、敦煌に関する3章の第1)である。

まず取り上げるのは第3章の中の次の2か所である。スタインはインドから中国領トルキスタンへ出かけるのに、毎回経路を変えている。その第2次でアフガニスタン領を通過した。彼はいう。「ある政治的幸運が、アフガニスタン国王、故アミール=ハビーブラーをして、彼の領土の一部を通過する許可を、私が全く予想もしなかった早さで私に与えるようにした。普通なら、アフガニスタンは神経質に警備されている *jealously guarded* のである。」

またいう。「私はオクサス川の水源に立って、この川を〔西へ向かって〕下って行けば、昔のバ

クトリアという魅力ある地域があり、私が若いときからそこにあこがれていたのだと考えると、とてもうれしかった。しかしながら、私がその地域へ行くことは禁ぜられていたし、不利な政治的条件によって今でもそうである。しかし私が東に向かって、パミールにある中国〔清朝〕との国境の方へ進むには、貧しいワハン地方の乏しい物資の中から供給しうるかぎりの援助が、アミールの命令によって与えられるはずである。」

問題は、スタイン一行が、なぜアフガニスタン東北隅ワハン地方の通過を許されたか、そしてなぜバクトリアなどアフガニスタン中央部への入国を許されなかったか、ということである。ハビーブッラー（在位1901-19）は国王アブドゥル・ラフマーン（在位1880-1901）の子、1919年2月19日から20日にかけての夜、避寒地ラグマーンで暗殺された。これはスタインがこの本を執筆したわずか前で、故人であることを示すために「故」をつけてある。その父アブドゥル・ラフマーンにはつけていない。「アミール」はムハンマドザイ系（ドースト・ムハンマドの子孫）の国王の称号である。それ以前のサドーザイ系の王は「シャー」と称した。

アブドゥル・ラフマーンはアフガニスタン王国でもっとも重要な国王である。つまり彼の治世にこの国の境界や統治形態がほぼ成立したのである。しかし『アジア歴史事典』（平凡社）や『東洋史辞典』（東京創元社）には項目が立てられていない。彼は北のロシアと東のイギリス領インドにはさまれている自国の独立を維持するのに苦勞した。彼は近代化よりも独立を求めた。例えば、アフガニスタンに鉄道を敷設しようとするヨーロッパ人の申し出を、彼はすべて拒否した。その子ハビーブッラーが、自国の領土を英露両大国から「神経質に警備」しようとしたのは当然である。したがってスタイン一行がアフガニスタン中心部に入ることは不可能であった。では彼はなぜワハン地方を通過することができたのか。

アメリカの中国・モンゴリア研究者ラティモア⁽⁴⁾は、ロシアと交渉したイギリス代表団の1人 Thomas H. Holdich 大佐の言を引いている。「この国境線は、我々とロシアとの間の緩衝地帯を設定した。といっても堂々たる緩衝とはいえない。いわばアフガニスタンの細くて長い腕が伸びて、指先が中国に触れているという感じである。ある箇所では幅が8マイルしかなく、朝の日課の乗馬で横断できるほどである。」

イギリスの元中佐でインド政府に勤務したフレイザー＝タイトラー⁽⁵⁾はいう。「アブドゥル・ラフマーンは気が進まないながらも、彼の領域の東北端にあるワハン溪谷という住みにくい土地の支配を引き受けることに同意した。インド政府は行政費をまかなうために、毎年半ラク〔1 lak は10万〕ルピー（5,000ポンド）を支払うことにした。イギリスから見れば、ヒンズークシ山脈の東北端をロシアの侵略から守るには、相応な代価であった。」

アメリカの人類学者デュブリー⁽⁶⁾はこう書いている。「アフガニスタンの東北国境において、ロシアはワハン地域を調査・併合しようとした。このことは同国の東北国境をおびやかす、ロシアとイギリス領インドが共通の国境をもつ〔直接に境を接する〕に至るはずであった。これを真剣に考慮したイギリスは積極的態度をとり、ロシアを交渉に引き出した。アミール＝アブドゥル・ラフマーン

ンは、イギリスがアフガニスタンの外交権を握っているという事情から、傍観者の立場を保持した。イギリスとロシアは、アム川以北はロシア、以南はアフガニスタンとすることに一致した。イギリスはアフガニスタンに、ワハン支配を受け入れるよう要求した。この地方は高山地帯で、地図も完全なものではなかった。アブドゥル・ラフマーンはこの贈り物に反対した。つまり自分の国内に多くの問題をかかえており、その上に、ワハンやパミールのキルギス族反徒に責任をとりたくなかったのである。しかしながら、ワハンとパミールがアフガニスタンに与えられた結果、イギリス領インドはツァー支配ロシアと全く境を接しないことになった。」

また故郷がパミールに近いアフガン人類学者シャフラーニー⁽⁷⁾はこう説明している。「この協定〔1894年末、イギリスとロシアの間に成立したパミール地方での国境協定〕の条項に、ワハン渓谷の管理——アミール＝アブドゥル・ラフマーンは始めは気が進まなかった——を維持するために、イギリス政府が彼の政府に、毎年5万ルピーの補助金を支払うことが含まれている。95年7月、大パミールのゾル・コル湖畔に、イギリスとロシアの公式代表とアフガニスタンの非公式代表が会合し、ロシア、アフガニスタン、イギリス領インド、中国のあいだの国境画定が成立した。中国政府はこの交渉に参加しなかったけれども、とくに異議を唱えなかった。かくて“ワハン回廊”と“アフガン・パミール”が成立し、それらはいわば“中立地”、換言すれば世界の三大国の間の“緩衝地帯”となった。イギリスにとっては、この国境画定は非常に重要であった。そのわけは、アミールがワハンという細長い地域の領有を引き受けたおかげで、ロシアとインドが全く国境を接しないことになったからである。」

父アブドゥル・ラフマーン王のときに、維持費まで添えて自分の領土としてイギリスから与えられたワハン回廊について、ハビーブッラー王としてはスタインがそこを通過するのをこばむわけにはいかなかった。⁽⁸⁾

アミールから派遣された大佐の指揮する大げさなアフガン護衛隊（歩兵2箇中隊と騎兵1箇分隊、計200名近く）が、ひと月も前からスタイン一行（スタインとインド人3名、計4名）を待っていた。これだけの人数の食料を供給するのは、寒冷地ワハンにとって重荷であった。住民はおとなしく、紛争はおこらなかった。スタインは護衛隊と住民に迷惑をかけないため、なるべく急いでアフガン領を通過して中国領に入った。

スタインの調査旅行に対して、アフガニスタン国王よりも先に援助を与えた人は、Colonel Sir Harold Deane, Chief Commissioner of the North-West Frontier Province, 即ち西北辺境州知事、大佐、ハロルド・ディーン卿である。この州の区域はインダス川以西の北部で、アフガニスタンに接し（国境画定は1893年）、パターン（アフガン、パシュトゥーン）族の住地で、中央の威令の届きにくいところである。この州は1901年に設置され、ディーンが初代知事となったが、08年、スタインの第2次調査旅行中に病死した。スタインはディーンを my lamented late chief と呼んでいる。

スタインの中央アジア旅行記から、いくつかの問題を拾ってみる。彼は新疆省で中国語の湖南方言を習ったという。1876年に、湖南省出身の左宗棠が清朝の新疆征討総司令官になった。ラティモ

アによれば、「彼が率いた軍隊は主として湖南出身者から成っていた。彼らの多くは作戦終了後も新疆に留まった。あるものは地主や省政府官吏になった。この政府で彼らは長く圧倒的な支配力を行使したので、新疆は“湖南の植民地”と呼ばれた。」⁽⁹⁾

スタインが始めて敦煌の千仏洞を見たのは、1907年3月である。5月にそこで great annual religious fair があったという。2次の公式報告書にも great annual fête としか書いてない。またその個人的記録には annual pilgrimage to the shrines, また great fête, a sort of religious fair とある。松岡譲「敦煌物語」⁽¹⁰⁾も、ミルスキー『スタイン伝』⁽¹¹⁾も、スタインのこの記述に従って、祭日という以上のことは書いていない。5月の宗教祭日とは、旧暦4月8日の釈迦誕生祭のことである。これについては井上靖⁽¹²⁾が記録しているので有益である。

第2章 新疆の社会と経済

オウエン・ラティモア『アジアの焦点』は、中華人民共和国成立以前の新疆地方のいくつかの分野について、きわめて有益な調査・研究の成果を載せている。この地方は、乾燥地帯であることと、住民の大部分がイスラム教徒であることにおいて、西アジアと共通点があり、それとの比較は有益であろう。

本書第4章「新疆の諸民族」に、新疆省の人口について、1940—41年の、省警察当局の調査の結果が最良の数字として、3,730,000が示されている。⁽¹³⁾その後で、宗教別人口（脚註として）と言語別人口が載っている。次のとおりである。

宗教別人口

a. イスラム教	3,439,000
b. 儒・仏・道教	215,000
c. ラマ教	63,000
d. ギリシア正教	13,000
計	3,730,000

この分類では、中国的宗教たる儒・仏・道の3教が1種類として、イスラム教などと並置されている。これの説明としてラティモアはいう。「儒仏道3教の道徳的教訓や儀礼的習慣があいまいに結合し、それが大部分の中国人の生活における宗教に対する要望を満足させている。」似たような現象は日本人についてもあり、ここでは神道・仏教・キリスト教である。

言語別人口（言語が民族の示標であるから、民族別人口と解してもよい）

I アルタイ語族

A テュルク諸語

1. ウイグル	2,941,000
2. カザフ	319,000

新疆に関する覚え書

3. キルギス	65,000
4. ウズベク	8,000
5. タタル	5,000
計	3,338,000
B モンゴル諸語	
6. モンゴル	63,000
C ツングース諸語	
7. 満州語	12,000
II インド・シナ語族	
8. 中国語	294,000
III インド・ヨーロッパ語族	
9. イラン諸語	9,000 (タジク族)
10. ロシア語	13,000

宗教と言語の人口の関係を、上記の記号で図示すると、下のようになる。

宗教	言語
a	1—5, 9, および8のうちの92,000人
b	7, および8の残り202,000人
c	6
d	10

第5章「地理と経済発展」で、新疆の産業としてまず牧畜が挙げられ、ラティモアは1943年の数字を次のように示している。

ヒツジ, ヤギ	11,720,000 頭
ウシ	1,550,000
ウマ	870,000
ラクダ	90,000

牧畜は主としてジュンガリア、即ち天山山脈以北のステップにおいて行われており、飼養者はカザフ族とモンゴル族である。人口1人当りのヒツジ・ヤギは約3頭である。なお『理科年表』によると、年間降水量は、天山以北のウルムチで、292ミリ(1907—33年)、天山以南のカシュガルで、86ミリ(1934—44)である。

比較のために、1960年ごろのアフガニスタン国の牧畜の推定データを示す。

普通のヒツジ	1,300 — 1,400 万頭
カラクル毛皮用ヒツジ	500 — 550
ヤギ	600 — 800
計	2,400 — 2,750

ウシ	200	—	210
ウマ, ラバ	20	—	25
ラクダ	20	—	30

その他は略す

当時のアフガニスタンの推定人口は1,200万であるから、1人当りヒツジ・ヤギは約2頭となる。またウマの比率が新疆より低い。これにより、新疆がアフガニスタンより、牧畜ないし遊牧が盛んであるといえよう。

新疆の牧畜について、ラティモアは興味ある数字を紹介している。即ち自然条件がジュンガリアに似ている Tannu-Tuva 地方（清朝領のとき Urianghai と呼ばれ、清朝滅亡後、自立、のちソ連領となる）において、植物の種類600のうち、家畜の食う種類の数は次のとおりである。ウシ：56，ウマ：82，ヒツジ：570。つまりヒツジ（ヤギも同様であろう）はほとんどあらゆる種類（有毒でないすべて）の植物を食うことがわかる。

因みに、松井健によれば、アフガニスタン東北部のシワ高原の夏営地の草本は72種で、家畜（そのほとんどはヒツジ）の食う種類は43，食わないもの26，家畜の種類により食うもの2，不明1である。⁽¹⁴⁾

次は農業である。これは主として天山以南のオアシスにおいて営まれ、その住民の大多数を占めるウイグル族のほとんどがこれに従事している。乾燥地帯であるため灌漑が必要で、河川によるものと、人工地下水道 kariz によるものがある点、西アジアと同じである。主要農作物の年間収穫高を示し、比較のためにアフガニスタンの数字を添えておく。

	新疆 ⁽¹⁵⁾	アフガニスタン
コムギ	523	2,210 千トン
トウモロコシ	331	696
コメ	71	308
計	925	3,214
人口1人当り	271	267 kg

アフガニスタンの収穫高は、1950年代後半4年間の平均で、人口は1,200万とする。新疆では、オオムギ・高粱・エンバク・エンドウマメを1群として、飼料作物（長距離運搬用ラクダのため）とし、これが119千トンある。アフガニスタンでも、オオムギ330千トンがあり、家畜用・人間用どちらにも使える。1人平均1年間の穀物消費量は約150kgであるから、両地域とも食料は自給できる。⁽¹⁶⁾

オアシス、即ち乾燥地帯の農耕地の例として、天山南麓のクチャが紹介されている。そこでは“bazaar”と呼ばれる市街地を中心として、同心円的に農地がひろがっている。中心から外へ順に並べると次のようになる。オアシスを具体的に描写したものとしておもしろい。

1. 市街地（職人の店、市場）

- | | |
|---------------------|--------------|
| 2. アンズ園（市場へ出す換金作物） | 肥料（しもごえ）を用いる |
| 3. コメ，トウモロコシ，コムギ，ワタ | 同上 |
| 4. キビ，高粱，ジャガイモ | 肥料なし，輪作による |
| 5. 荒野（放牧地ともなる） | |

第6章「社会構造：生きている過去」で扱われる社会構造の1問題として，khoja についてのラティモアの簡単な説明を検討する。新疆地方では，定着オアシス（遊牧ステップと区別して）において，14—17世紀に，チャタガイの子孫と称する者が，言語はトルコ語，宗教はイスラム教となり，khan という称号をとる支配層であった。15世紀に khoja が出現し，17世紀に khan に取って代った。

khoja，ベルシア語で kh^wāja は，北部アフガニスタンでは，初代カリフ＝アブー・バクルの子孫と称する者をいう。新疆のホジャ家は，ボハラの神学者で，マホメットの子孫と称する者が，15世紀始めにカシュガルへ来て，そこに土地を得，宗教的・政治的・経済的権威を樹立したものである。このホジャ家について，ラティモアは“following a pattern not uncommon in Moslem lands, a line of hereditary religious potentates”と説明している。ここで問題にするのは，イスラム的支配者が世襲的であることが not uncommon な型であったということの意味である。否定の否定は肯定，not uncommon イコール common と単純に考えてはいけない。歴史上，支配者の地位は世襲的であるのが common であった。ただイスラム地域では選挙制で，世襲制は uncommon であった。具体的には，マホメットから正統カリフにかけての継承である。しかしウマイヤ朝成立以後，世襲制が優勢になり，uncommon でなくなった。ただしイスラム教世界では，現代でもマホメットたちの時期の慣習が，理想として尊重されている。ラティモアはホジャ家の継承を説明するのに，イスラム初期をも頭に入れて文を作っている。読者はこの点まで読み取らねばならない。

ラティモアは，第2章「1800—1917年の新疆をめぐる英露競争」において，Yakub Beg (ca. 1820–77) を「内陸アジアの冒険家」Inner Asian Adventurer として取り上げている。彼はホジャ家に仕えていたが，のちこれに取って代った。イギリスはイスラム教徒と共同戦線を作って，ロシアに対抗しようとした。そして同盟者として，ヤアクーブ・ベグ支配下の中央アジアや，オスマン・トルコを支援した。ラティモアはいう。「この計画の一部として，イギリスは，トルコのスルタンがカリフの称号をとること，即ち全イスラム世界の支配者となることを，強くすすめた。それはトルコのスルタンが，イスラム世界をしてロシアに敵対させるようになることを，イギリスが願ったからである。」

問題は新疆から少し離れて，オスマン・トルコの「スルタン・カリフ制」となる。『イスラム事典』平凡社，1982によれば，「カリフ」の項（森本公誠）にいう。「1517年，オスマン朝のセリム1世がエジプトを征服した時，カリフをイスタンブルに拉致し，カリフ位を譲られたとされているが，これは後世の虚構であるらしく，オスマン朝のスルタンが同時にカリフを標榜するようになるのは，18世紀後半のことで，それは同時にオスマン朝国家の衰退を意味していた。」また同書「スルタン」の項（永田雄三）にはいう。「1517年にエジプトを征服してアラブ世界を支配下に収めて以来，オ

スマン朝スルタンは、同時にカリフとしての資格を兼ね備え、その威光は遠く中央アジア、インド、東南アジアにまで及んだ。」

スルタン・カリフ制について、永田は森本のいう「後世の虚構であるらし」い通説を書いている。カリフの威光が中央アジアにまで及んだことは、ラティモアによれば、スルタン＝アブデュルアジーズがヤアクーブに対して Amir al-Mu'minin（「信者たちの長」の意、カリフの称号）の肩書を与え、また小銃200挺、大砲3門と、3人の軍事教官を提供したことに見られる。しかしこれらはすべてイギリスが操ってさせたもので、まさに「オスマン朝国家の衰退を意味していた。」

近代トルコ史研究者バーナード・ルイスによれば、「アブデュルアジーズの治世〔1861—76〕、オスマンのスルタンは、オスマン帝国の元首であるばかりでなく、全イスラム教徒のカリフともなった。¹¹⁷⁾ このスルタン・カリフの在位期間は、偶然ながら、内陸アジアの冒険家の活躍期と一致する。

ヤアクーブは清朝の左宗棠の軍の前に敗れた。それも大した戦闘もなしに、毒を、自分で飲んだか、または人に飲まされて、死んだ。新疆におけるイギリスの対ロシア戦線は、かくして崩壊したが、本稿第1章で述べたパミール地方の国境画定により、ロシアに対するイギリスの不安は減少し、まもなく1907年の英露協商となる。

第3章 日本軍の熱河作戦

ラティモア『アジアの焦点』、第7章「内陸アジアの十字路にて」の中に、「日本の影の下の新疆」Sinkiang under the Japanese Shadow という見出しの部分がある。日本の勢力が新疆にまで及ぶ可能性があったのかという疑問がおこる。ラティモアはいう。「1933年2月末から3月始めにかけて、〔関東軍の一部たる〕日本軍は、熱河省 the province of Jehol に侵入し〔省長湯玉麟が張学良と結んで反日・反満の態度をとったことを理由として〕、これを日本のかいらい国家満州に併合した。この作戦において、10万平方マイル——その大部分は山地で、そのすべてにおいて交通手段はきわめて原始的であった——が、わずか10日間で占領された。そこで使用されたのは機械化部隊 motorized columns である。1933年のこの作戦こそが、真に大規模で、航空部隊の支援を受けた air-supported 機械化部隊の軍事的可能性を、最初に証明したのであって、〔ヒトラー支配の〕ドイツがポーランドへ機械化部隊を進撃させたのは、これよりおくれ、39年のことである。日本軍は自らの必需品を携行し、旧式の教令を無視して、“側面は暴露したままで、敵軍をうしろに残して、あとでそれを掃討することにした。”〔 〕 “ ” 印は引用者)

ラティモアは自分の他の著書 *China, A Short History*, New York, 1947 でも、同じことを次のように書いている。「1933年、日本軍は熱河省を攻撃し、それを日本にではなく、満州国に併合した。熱河省内に10万平方マイルの地域があり、そのすべてを日本軍は10日間の作戦で占領した。その方法として、今までかつて演習においてすら見なかったほどの規模で、機械化部隊を使用した。アメリカとイギリスはこの作戦に特別の注意を払わなかったようであるが、ドイツはこれに注目した。

日本軍が熱河で示した戦法はドイツを刺激し、機械化部隊を拡張して、それによってのちにオーストリアとチェコスロバキアを占領し、ポーランドを制圧するに至らしめた。」(p. 156)

熱河作戦の軍事史的意義は、日本ではあまり認められていないようである。

熱河作戦の構成

○上級機関

関東軍 司令官 武藤信義大将 参謀長 小磯国昭中将
第8師団 長 西義一中将

○実施部隊

第16旅団 長 川原侃少将

歩兵第17連隊(秋田県) 長 長瀬武平大佐 トラック輸送

戦車中隊 長 百武俊吉大尉

八九式中戦車 5両 57ミリ砲1, 機銃2, 時速25キロ

九二式重装甲車 2両 13ミリ機関砲1, 機銃1, 時速40キロ

これが「川原挺進隊」として有名になった部隊で、前に引用した“ ”の部分が、「挺進隊」の性格を描写したものである。

○支援航空部隊

関東軍直轄飛行隊 長 牧野正廸大佐

飛行第10大隊(偵察機), 11大隊(戦闘機), 12大隊(爆撃機)

ラティモアによれば、日本軍のこの作戦より前に、アメリカの Roy Chapman Andrews, スウェーデンの Sven Hedin, フランスの自動車会社 Citroën などが、内モンゴリアや新疆を自動車で通過できることを証明していたから、日本軍が熱河作戦を西方へ延長すれば、新疆にまでその影響を及ぼすことは可能であった。しかし日本はアメリカとの戦争に突入したために、新疆にまで手がまわらなくなったのである。

註

- (1) 筆者の個人的な思い出を記しておく。アフガニスタンのカーブルに留学中、下宿の近くに外人墓地があり、ふだんは門が閉ざされて入れなかった。1961年1月1日、偶然そこが管理人によって開かれていたので、中に入り、スタインの墓を拝んだ。上にはうっすらと雪がつもっていた。彼は生涯独身で、その死は満81歳の誕生日の1か月前であった。墓碑銘は次のとおりである。

MARK AUREL STEIN

OF THE INDIAN ARCHAEOLOGICAL SURVEY

SCHOLAR EXPLORER AUTHOR

BY HIS ARDUOUS JOURNEYS IN

INDIA CHINESE TURKISTAN PERSIA AND IRAQ
HE ENLARGED THE BOUNDS OF KNOWLEDGE

BORN AT BUDAPEST 26 NOVEMBER 1862
HE BECAME AN ENGLISH CITIZEN IN 1904
HE DIED AT KABUL 26 OCTOBER 1943

A MAN GREATLY BELOVED

- (2) オーレル・スタイン著、沢崎順之助訳『中央アジア踏査記』、白水社、1984。
オーウェン・ラティモア著、中国研究所訳『アジアの焦点』、弘文堂、1951。
同氏と妻エリノア著、小川修訳『中国』、岩波新書、1950。
- (3) *On Ancient Central-Asian Tracks* by Sir Aurel Stein, edited and introduced by Jeannette Mirsky, New York, 1964.
- (4) Lattimore, *op. cit.*, p. 260.
- (5) Sir Kerr Fraser-Tytler, *Afghanistan*, 2nd ed., Oxford Univ. Press, 1953, p. 169. イギリスの植民地支配者で、軍人・政治家・学者を兼ねることは珍しくない。
- (6) Louis Dupree, *Afghanistan*, Princeton Univ. Press, 1973, p. 424. 本書は、同国の政治情勢の変化により、78年と80年に、それぞれ Epilogue をつけ加えて出版されている。
- (7) M. Nazif Mohib Shahrani, *The Kirghiz and Wakhi of Afghanistan*, Univ. of Washington Press, 1979, p. 37. 著者の出身地シャフラーンは、バダフシャーン州の首府ファイザバードから南方へ馬で6時間の、ウズベク族の村。著者はカーブル大学を経て、ハワイ大学で人類学を学んだ。本書は1972—75年の調査の成果。
- (8) イギリスはアフガニスタンの外交権を握っていた。したがってイギリス本国外務省は、スタインがハビーブッラーに国王の称号をつけて、H.M. Habib-ullah, King of Afghanistan と呼ぶことに難色を示した。註(1)の上, p. 306。
- (9) Lattimore, *op. cit.*, p. 140.
- (10) 松岡譲『敦煌物語』、1943。ここでは『世界教養全集』18, 平凡社, 1961所収のを用いた。これによると、スタインの翌年に敦煌へ来たフランスのポール・ペリオについて、次のように書いている。「ふとペリオは、今日が三月三日、上巳の節句に当たっていることを思い出し、この記念すべき日が中国古来からの祝日に当たっていたことをただ事とは思わなかった。善は急げとばかりに、その日からペリオは調査にかかった。」
- (11) J. ミルスキー著、杉山二郎・伊吹寛子・瀧梢訳『考古学探検家スタイン伝』上下、六興出版、1984、上、p. 340。
- (12) 他にもあろうが、ここで扱ったのは「敦煌——壁画芸術と井上靖の詩情展」毎日新聞社、1979のカatalogで、その中に「四月八日」と題する短文が収められている。「毎年四月八日、敦煌千仏洞の前の疎林の中には市が立つ。沙漠の村々から人々は集って来、胡弓を弾き、歌を唄い、屋台の店々が立ち並ぶ。このお釈迦さまの日の賑わいは豊穡だ。……」
敦煌でのスタインの記事について、こまかいことを指摘したい。彼によれば、敦煌の住民の間では、玄奘は、大唐西域記や慈恩寺三蔵法師伝でなく、西遊記によってよく知られ、「唐僧取经」の句が普及していたという。「唐僧」の語を、1933年版・64年版とも T'ang-sên と表記している。sên は誤りで、sêng でなければならない。2次の報告書・記録とも正しく T'ang-sêng となっている。スタインはきちょうめんな人で、第2次のときに第1次の報告書のゲラ刷りをもって行って、仕事の合間に校正をしていた。33年版で誤ったのは、彼がもう70歳になって、校正を人まかせにしたからであろうか。64年版はそれをそのまま受けついだものである。
- (13) NHK ラジオ中国語講座、1986年5月号の付録文(牧田英二)によれば、新疆ウイグル自治区の現在の人口は、約1,300万である。また82年調査による民族別人口も紹介されている。
- (14) 松井健『バシュトゥン遊牧民の牧畜生活』(京都大学人文科学研究所調査報告, 33), 同研究所, 1980, pp. 33—34. 78年の調査の成果である。ソ連軍の進駐以後、この調査の継続は不可能となった。
- (15) 原書 p. 167で、コムギの産高を253,000 tons としているのは誤植で、2と5を入れかえなければ、他の作物の産高・百分率と数が合わない。翻訳もこの誤りをそのまま踏襲している。
- (16) 最近出版された本により、他の地域の1人1年の穀物消費量を示す。
費孝通著、小島晋治ほか訳『中国農村の細密画』、研文選書、1985、p. 83によれば、上海西方の開弦弓村という米作地で、

新疆に関する覚え書

1936年に、老婦人1，成人2，子供1から成る平均的世帯の米の年間消費量は、1,600斤であった（1斤は0.6kg）。p. 252には、1980年には1人1年1,000斤となり、中国全体の547.5斤よりはるかに多いと述べている。

N. ワース著，荒田洋訳『ロシア農民生活誌』，平凡社，1985，p. 109には次のようにいう。1920年代に，農民1人1日の穀物消費量は，パン（主にライ麦パン）として500～700g，そのほかに小麦粉・そば・きび200g，1年に300kg近くであったと。原著者はフランス人。

(17) Bernard Lewis, *The Emergence of Modern Turkey*, 2nd ed., Oxford Univ. Press, 1968, p. 124.